

## 文献紹介 —日本—

渡邊彰悟・大橋毅・関聡介・児玉晃一編

『日本における難民訴訟の発展と現在（伊藤和夫弁護士在職50周年祝賀論文集）』

（現代人文社、2010年）

本書は半世紀にわたり難民訴訟を含む多くの人権訴訟に携わってこられた伊藤和夫弁護士（本書刊行直後の2010年7月に逝去）の在職50年の祝賀論文集として編まれたものである。収録された16の論稿は、日本の難民条約加入から30年間の難民訴訟の発展と現在の到達点を、実務、学問の双方から示すものであり、本書が日本における今後の難民研究の礎の一書となることは間違いないだろう。

本書は3部により構成され、第1部「日本の難民事件の歴史」では、チャン・メイラン事件（池田純一）、ブイ・ムアン事件（佐藤安信）、張振海事件（住田昌弘）、趙南事件（関聡介）という代表的な4ケースを通して、これまでの難民訴訟を歴史的に振り返り検証するとともに、現在に至るまで残された課題を明らかにしている。

続く第2部「難民問題の現代的課題」では、日本の難民訴訟に長く携わってきた日本を代表する実務家、研究者らが、精緻かつ意欲的な論稿を展開している。論題だけを見ても、「難民条約における迫害の相貌」（阿部浩己）、「気候変動の影響による人間の移動——国際法からの一考察」（新垣修）、「迫害の主体論」（渡邊彰悟）、「パスポート論、平メンバー論、個別把握論、帰属された政治的意見、本国基準論」（空野佳弘）、「本質的变化論」（下中奈美）、「内戦と難民該当性」（本間浩）、「ジェンダーに関する迫害——女性からの難民申請を中心として」（渡部典子）、「日本における信憑性評価の現状とその課題」（鈴木雅子）、「事実の立証に関する国際難民法の解釈適用のあり方に関する一考察——イギリスの難民認定実務における事実の立証をめぐる問題の検討を中心として」（難波満）、「庇護希望者・難民申請者が直面する諸問題」（田島浩）、「行政事件訴訟法改正後の収容執行停止——収容は『重大な損害』である」（児玉晃一）、「EUにおける難民の保護——現状と国際法上の課題」（佐藤以久子）というように、非常に多岐にわたる論点が示されながら、1981年の難民条約加入から30年にわたる難民研究の進化が伝わる内容となっている。さらに、これらの論稿が、難民に寄り添った実務の過程を中心に浮き彫りにされてきた諸課題に応答する形で展開されてきたという意味において、生きた難民研究ともいえるべきものを示しているとも言えるだろう。

第3部「伊藤和夫弁護士の足跡」では、「難民事件に携わった30年の歩み」と題する伊藤弁護士本人へのインタビューが略歴とともに収録されている。「やはり、一番厳しい状況にあるのは難民だということですよ」という最後の言葉は、難民とともに歩んできた伊藤弁護士の30年間の原点を感じさせる言葉として印象的である。

伊藤弁護士が歩み残した足跡とともに、本書の執筆者らによる一人一人の難民に寄り添いながら構築される理論的展開は、難民訴訟実務や難民研究のみならず、学問の新たな可能性を探るものとしても大きな意義を持つものと言えるのではないだろうか。

藤本俊明（神奈川大学）